

哲学研究

第四百八十九号

第四十二卷
第七冊

有についてのカントのテーゼ

マルティン・ハイデッガー

標題に従へば以下に於てカント哲学の教説の一端が叙述されるべきである。そのことに依つて吾々は、過ぎ去つた或る一つの哲学について、教へられるところがあるであらう。このことにはそれなりの利益があらう。併しそれは勿論、伝統に対する感覚がなほ目覚めてゐる場合、さういふ場合にだけである。

然るに、まさにさういふことこそ、現状には殆ど当てはまらぬのであり、就中、何時からとなく絶えず如何なる処に於ても吾々人間に關はつてゐるものでありながら而も吾々が殊更には注目しないもの、さういふものの伝統が問題である場合には、最も当てはまらないのである。

吾々はそれを「有」といふ語に依つて名づけてゐる。その名は、「有る」とか「有つたので有る」とか「来りつつ有る」と吾々が言ふ場合に吾々が意味してゐる彼のを、名づけてゐる。吾々のところにまで届くとともに吾々がそこにまで届くところのものはずべて、口に出して言はれると否とに不拘、「それは有る」といふことを、通過して行く。事態がそのやうであるといふこと、そのことから吾々は何時如何なる処に於ても決して逃れて行くことは出来ないのである。「有る」といふことは、それが示す明白な諸変化そして又隠密な諸変化のすべてに亘つて、常に吾々

に熟知されてゐる。而もそれにも不拘、「有」といふこの語が吾々の耳を打つや否や、吾々は直ちに次の如くに確乎として断言するのである、すなはち、ひとはその語の下では自分自身に何も表象することが出来ない、ひとはその語の許では自分自身に何も思惟することが出来ない。

恐らく、この性急な確認は正しいであらう。その確認は次のことを当然なこととして正当化する、すなはちそれは、「有」についての——雑談とまでは言はなくても——論議にひとは癩癩を起し、而も非道く腹を立てて「有」を嘲笑的にする、といふことである。有について些かも追思することなく、そこへ有に至る思惟の道について些かも省察することなしに、ひとは、「有」といふ語が果してものを言ふか否かを決定する審議基準たることを、敢て自らに僭取するのである。そのやうにして無思慮が原理にまで高められてゐるといふこと、そのことになほ躓きを感じる人は殆ど誰一人としてない。

曾つては吾々の歴史的現有の源泉であつたもの、それが今では嘲笑の砂に埋もれ塞がれてゐるといふこと、そのやうなところにまで事態が来てしまつてゐるとすれば、或る一つの単純な熟慮に立ち入ることが、奨められて然るべきであらう。

ひとは「有」といふ語の許では自分自身に何も思惟することが出来ない。「有」とは何を謂ふのか、そのことについて或る教示を与へることこそ従つて諸々の思想家の任とする事柄であらう、さういふ推察が成り立つのであるが、その推察に関しては一体如何なる事態になつてゐるのであらうか。もしそのやうな教示へを与へることですら思想家達にとつては十分な程重いことであるとすれば、その場合には少くとも次のことが彼等のなすべき事柄に留まり得るであらう、すなはちそれは、有を思惟に値するものとして常に繰返し示し、而もこの思惟に値するものがまさにかくの如きものとして人々の視圈の内に留存するやうに、示すことである。

吾々は上に言はれた推察に従はう、そして或る一人の思想家について、彼が一体何を有について吾々に言ふべきこ

ととしてもつてゐるかに、傾聴するとしよう。吾々はカントの言ふことに聴かう。

〈併し〉一体何故に吾々は、有について若干のことを経験するために、カントの言ふことに傾聴するのか。それがさうされるのは二つの理由によつてである。その一つは、有の所在究明に於て或る一つの遠くにまで達する歩みをカントが遂行した、といふことである。もう一つは、カントのこの歩みが伝統への忠実さから、といふのは同時に伝統との対決の中で、結果し、その対決を通じて伝統は或る新しい光の内に到達する、といふことである。有についてのカントのテーゼへ言及し指示することのこの両方の理由は、吾々に省察への或る衝撃を与へる媒介となる。

有についてのカントのテーゼは、彼の主著たる「純粹理性批判」(一七八一年)の内に於けるその体裁に従へば、次の如くに言はれてゐる、すなはち、

「有は明らかに如何なるレアルな述語でもなく、すなはち、一つの物の概念に附け加はつて来ることの出来るやうな何か或るもの、さういふ或るものの概念ではない。それは単に、一つの物を、もしくはは一定の諸規定を、それら自身に於て定立することである」(A598, B626)と。

今日有るもの、すなはち有るものとしては吾々を圧迫し可能的なる非有としては吾々を脅迫するもの、さういふものに直面しては、有についてのカントのテーゼは吾々には抽象的にして乏しく色褪せたもののやうに思はれる。併し乍ら、その間に實際ひとは亦哲学に次のことを要求したのである、すなはちそれは、哲学は最早、世界を解釈したり諸々の抽象的な思弁の内にもうろろすることに満足すべきではなく、世界を実践的に変革することが問題であらう、といふ要求である。併し乍ら、そのやうに思惟された世界変革は、上に言はれた要求の背後にも實際既に思惟の或る変革が存してゐる如く、思惟が變つて行くことを、予め必要とする。(Vgl. Karl Marx, Deutsche Ideologie: „A. Thesen über Feuerbach ad Feuerbach, II.“: 「哲學者達は世界をただ様々に解釈してきたに過ぎない、世界を變革することが問題であらうのに。」)。

併し、思惟に値するものの内へ入つて行く道、その道へ思惟が出立するのではないとすれば、抑々如何なる仕方か思惟は變つて行くべきであらうか。ところで併し、有がそれ自身を思惟に値するものとして与へるといふこと、このことは任意的な前提でもなく恣意的な発案でもない。それは伝統の箴言であり、その伝統は今日でもなほ吾々を規定してゐるのであり、而もひとがそのことを承認しようとするよりも遙かに決定的に、吾々を規定してゐるのである。

カントのテーゼが抽象的にして乏しきテーゼとして〔吾々に〕他所他所しく思はれるのは、ただ次の場合にだけである、すなはちそれは、このテーゼの解明のためにカントは何を言つてゐるのか、更に彼はそのことを如何に言つてゐるのかといふことを、追思することを吾々が怠る場合である。彼がこのテーゼを解明する道に、吾々は従つて行かねばならない。その内にその道が通つてゐるところの境域を、吾々は吾々の眼前に齎してこなければならぬ。「有」という名の下でカントがその所在を究明してゐる事柄がそこにこそ適はしく所屬してゐるところの場所〔所在〕を、吾々は熟思しなければならない。

そのやうなことを吾々が試みるならば、或る驚くべきことがそれ自身を示してくる。すなはちそれは、カントは彼のテーゼを寧ろただ「挿話的」にしか、すなはち彼の諸々の主要著作に對する幾つかの挿入句、註解、附録といふ形式に於てしか説明してはゐない、といふことである。そのテーゼは、その実質とその射程とに適はしき仕方である一つの体系の原始命題として挙げられてゐるのではなく、更に一箇の体系へと展開されてゐるものでもない。一見欠点の如くに見えるこのことは、併し乍ら次の如き長所をもつてゐる、すなはちその長所とは、様々な挿話的な箇處に於てその都度カントの或る根源的省察が言葉になつて現れて来てをり、その省察は完結的省察であると自ら思ひこむ妄想に決して取りつかれてゐない、といふことである。

カントのそのやうな行き方に倣つて以下の叙述はそれと相等しい行き方をしなければならぬ。その叙述は次の如き意図に依つて導かれてゐる、すなはちその意図とは、カントのこのテーゼは彼の著作の建築術の殊更に打建てられ

た骨組を形造つてゐないとはいへ、このテーゼの主導思想が、そのテーゼに対してカントのなした一切の解明を貫いて、といふのは彼の哲学の根本の立場を貫いて、到る処で如何に輝き透つてゐるかを、見えしめるといふ意図である。それ故、ここで遵守される（叙述の）進め方は次のことを目当てにして配置されてゐる、すなはちそのことは、幾つかの適当な本文を相互に対照せしめることに依つて、それらの本文が交互に照明し合ふやうにし、そのことを通して、直接的には言ひ表され得ない彼のものがそれでもなほ表面に現れて来るやうにする、ということである。

吾々がこのやうな仕方でもカントのテーゼを追―思惟するならば、その時初めて吾々は、有への問のもつ困難さの全体と併し亦その問のもつ決定的な点と問に値する点とを、経験するのである。その時初めて次のことへの省察が目覚めるのであり、そのことは、カントのテーゼと或る対決を敢てなす資格が果してそして亦如何なる程度にまで、現代的思惟に既に与へられてゐるか、といふことであり、その場合対決をなすとは、有についてのカントのテーゼは一体何処に基づいてゐるのか、そのテーゼは一体如何なる意味に於て根拠づけといふことを許容するのか、そのテーゼは一体如何なる仕方でもその所在が究明され得るのかと、問ふことである。これらの問に依つて特色づけられる思惟の諸課題は、暫定的であることを免れない最初の叙述のなし得る諸々の可能性を、踏み越えており、今日なほ行はれてゐる通例の思惟の能力をも、踏み越えてゐる。それだけに一層、伝統の言ふことに追思しつつ傾聴することが、依然として切要であり、追思しつつ傾聴することは、過ぎ去つたものの後を追つて執着するのではなく、現在するものを熟思するのである。カントのテーゼをもう一度繰返さう、すなはち、

「有は明らかに如何なるレアルな述語でもなく、すなはち、一つの物の概念に附け加はつて来ることの出来るやうな何か或るもの、さういふ或るものの概念ではない。それは単に、一つの物を、もしくはは一定の諸規定を、それら自身に於て定立することである。」

カントのテーゼは二つの陳述を含んでゐる。第一の陳述は否定的陳述であり、それはレアルな述語といふ性格を有

に否認してゐるが、とはいへ述語一般といふ性格を否認してゐるのでは決してない。従つて、そのテーゼのそれに続く肯定的陳述は有を「単に定立すること」として特色づけるのである。

テーゼの内容がその両方の陳述に配分された今でさへも、「有」といふ語の許では何も思惟されないといふ私見、さういふ私見を防ぐことは吾々には難しい。併し乍ら、吾々がへこのテーゼの「一層精確な解明を企てるに先立つて、「純粹理性批判」の構成と行程との内部に於て一体如何なる箇處でカントは彼のテーゼを語り出してゐるのかといふこと、そのことに吾々が注目するならば、手の着け様もないといふ現在の窮境は減少し、カントのテーゼは一層親しいものとなる。

ここで行きなりにほんの一寸と或る一つの否認され得ぬ出来事を想起して置かう、すなはちそれは、西洋的—ヨーロッパ的思惟は「有るものとは何で有るか」といふ問に依つて導かれてゐる、といふことである。そのやうな形でその思惟は有を問ふてゐる。この思惟の歴史の中でカントは或る一つの決定的な転回を、而も「純粹理性批判」を通して、遂行したのである。そのことに關して吾々は次のことを期待する、すなはち、カントは、有の所在究明と彼のテーゼの挙立とを以つて、彼の主著を導く主導思想を進行の内に齎したのである。へ併しそれはさうではなかつたのである。さうではなくして、吾々は「純粹理性批判」の最後の三分の一の部分に至つて初めて上記のテーゼに行き当るのであり、而もそれは「神の存在の有論的証明の不可能性について」(A592, B620)といふ標題を附せられてゐる節の内に於てである。

併し乍ら、吾々はもう一度、西洋的—ヨーロッパ的思惟の歴史を想起しよう、さうするならば吾々は次のことを経験する、すなはちそれは、有への問は有るものもの有への問として二形的である、といふことである。それは第一に次のやうに問ふ、すなはち、有るものは有るものとして一般に何で有るか。この問の圏域に属する諸考察は哲学の歴史の経過の内で有論といふ標題の下に到達する。「有るものとは何で有るか」といふ問は同時に次のやうに問ふ、す

なはち、有るものは最高の有るものといふ意味に於ては如何なるもので有り、そして又如何に有るか。それは神的名なるものと神との間である。この間の圏域は神論と称せられる。有るものの有への間の二形性格は、有―神―論といふ標題の内へと取纏められる。有るものとは何で有るかといふ二形的な問は、第一には、(一般に)有るものとは何で有るか、といふことである。その問は、更には、(端的に)有るものとは何(如何なるもの)で有るか、といふことである。

有るものへの間の二形性格は明らかに、有るものの有がそれ自身を示すその示し方に、存してゐるに違ひない。有はそれ自身を吾々が根拠と名づけてゐるもの、さういふものの性格に於て、示してゐる。有るもの一般は地盤といふ意味での根拠であり、その地盤の上で、有るもの更に立ち入つた如何なる考察も動くのである。最高の有るものとしての有るものは、一切の有るものを有の内へと発源せしめるものといふ意味での根拠である。

有が根拠として規定されてゐるといふこと、そのことをひととは今まで最も自明的なことと見做してゐる、とはいへ併しそれは最も間に値することである。一体如何なる点に於て有を根拠として規定することが出て来るのか、一体何処に根拠の本質は存するのか、それはここでは究明され得ない。併し、一見したところ外面的とおもはれる考慮にとつてさへも既に、次の如き推察が押し迫つて来る、すなはちその推察とは、有を定立として規定したカントの規定の内には、吾々が根拠と名づけてゐるものとの或る親縁性が統べてゐる、といふことである。positio, ponere〈定立、定立する〉とは、setzen, stellen, legen, liegen, vorliegen, zum Grunde liegen〈定立する、立する、置く、横はる、前に横はる、根底へ根拠に横はる〉といふことを意味する。

有論神論的に問ふことの歴史の経過の内次で次の如き課題が成立する、すなはちそれは、最高の有るものが何で有るか、を、証示するのみならず、有るものの中で最も有るものたるこのものは有る、すなはち神は存在するといふことを、証明することである。存在、現存在、現実性といふこれらの語は、或る一つの有り方を名づけてゐる。

一七六三年、すなはち「純粹理性批判」の出現に先立つ殆ど二十年も前に、カントは「神の現存在の証明のための唯一可能なる証明根拠」といふ標題の下で一つの著作を公刊した。この著作の「第一考察」は、「現存在一般」と「有一般」といふ概念について論じてゐる。吾々は既にこの箇處に於て有についてのカントのテーゼを見出すのであり、而もそれが亦否定的陳述と肯定的陳述といふ二重の形式を取つてゐることも見出すのである。この兩陳述といふ体裁は、「純粹理性批判」の内に於けるそれと、或る仕方では合致してゐる。批判以前の時期に属するこの著作の内では、否定的陳述は次の如くに言はれてゐる、すなはち「現存在は決して、何等かの物の述語ではなく、或ひは又その物の限定ではない」と。肯定的陳述は次のやうに言はれてゐる。すなはち「定立もしくは措定といふ概念は全く單純であり、有一般といふ概念と一様である」と。

先づ第一にへ吾々にとつては、次のことを指示することだけが必要であつた、すなはちそれは、カントがそのテーゼを言葉に齎したのは哲學的神論に属する問の圏域の内に於てである、といふことである。哲學的神論は有るものへの問の全体を支配してをり、すなわち形而上學をその中核内実に於て支配してゐる。そこから明らかに見られることは、有についてのこのテーゼは、その外見上の文字に従へば差當つて容易に吾々がさう信じさせられてしまふが如き、側面的にして抽象的なる教説の一端では決してない、といふことである。

「純粹理性批判」の内では否定的―防拒的陳述は「明らかに」といふ語に依つて導入されてくる。従つて、その陳述の言つてゐることは、誰にでも即座に分明に解る筈である、すなはち、有―「明らかに」如何なるレアルな述語でもない、といふことは。へ然るに、吾々現代人にとつてはその命題は決して直接的に察知されはしない。有―これは併しレアリテートを意味する。それでは一体如何にして有はレアルな述語と見なされてはならないのであるか。併し、カントにとつては「レアル」といふ語はなほその元來の意味をもつてゐる。それは、或る一つの *res* (へ物) につまり或る一つの事物につまり或る一つの物の事象内実に属するものを、意味してゐる。レアルな述語すなはち事物に属し

てゐる規定とは、例へば、石に關しては「重い」といふ述語であり、その述語は、石が現実に存在するか否かには、關りないのである。従つてカントのテーゼの内では「レアル」といふことは、吾々が諸々の事実や現実的なものを計算に入れる政治のことをレアルポリティックといふ場合に今日吾々が謂はんとしてゐることを、意味してはゐないのである。レアリテートとはカントにとつては現実性を意味してゐるのではなく、事物へを事物として規定してゐる規定性^{レアル}を意味するのである。レアルな述語とは、或る一つの物の事象内実^{レアル}に屬してをり従つてその物に屬すると言ひ渡され得る如きものである。或る一つの物の事象内実を吾々はその物の概念といふ仕方^{レアル}で吾々自身に表象する。「一箇の石」といふ語が名づけてゐるものを、吾々は吾々自身に表象することが出来るのであり、その場合この表象されたものは、その都度まさしく眼前に横はつてゐる一箇の石のやうに、存在しなければならぬといふことはないのである。存在、現存在、すなはち有は、「明らかに如何なるレアルな述語でもない」のであると、カントのテーゼは言ふ。この否定的陳述のもつ明白さは、吾々が「レアル」といふ語をカントのいふ意味に於て思惟するならば、直ちに現れて来る。有は如何なるレアルなものでもない。

だがそれへすなはち、有は如何なるレアルなものでもない、いふこととは一体如何にしてか。とはいへ吾々は、吾々の眼前に横はつてゐる一箇の石について、それすなはちこのこの石は存在すると、言ふ。この石は有る。従つて、「有る」すなはち有はそれ自身を、さきへに、如何なるレアルな述語でもないと言はれた場合と同様に明白に、述語として、すなはち陳述の主語としてのこの石についての陳述の内、示してゐる。カントは「純粹理性批判」の内^{レアル}に於ても亦、眼前に横はつてゐる一箇の石について陳述された存在が或る述語であることを、否認してはゐない。併し、「有る」はレアルな述語ではない。それでは、一体何について「有る」は陳述されるのか。明らかに、眼前に横はつてゐる石についてである。それでは、「この石は有る」といふ陳述中のこの「有る」は一体何を言つてゐるのか。それは、その石が石として何で有るかといふことについては、何も言つてはゐない。それは併し乍ら、石に屬

するものがここに存在する、有る、といふことを、言つてゐる。それでは有とは一体何を謂ふのか。カントは彼のテーゼの内で肯定的陳述に依つて答へてゐる、すなはち、有は「単に一つの物を、もしくは一定の諸規定を、それら自身に於て定立することである」と。

この陳述の文字は容易に次のやうな私見へと誘惑する、すなはち、「単に一つの物の定立」としての有は、それ自身に於ける且それ自身にとつての物へすなはち、所謂「物自体」といふ意味での物に、関はると。そのテーゼは、それが「純粹理性批判」の内で語り出されてゐる限りは、このやうな意味をもち得ない。物とはここでは、或るものといふ程の意味であり、或るものと言ふ代りにカントは亦、客体とか対象と言つてゐる。カントは亦、定立が、そのレアルな諸規定の一切をもつた物に関はるとも、言つてはゐないのであり、そこで意味されてゐることは寧ろ、単に物もしくは一定の諸規定をそれら自身に於て定立する、といふことである。「もしくは一定の諸規定」といふ言廻しが如何に解釈されるべきかは、差当つて吾々は空白のままにして置かう。

「それら自身に於て」といふ表現は、或るもの「自体」すなはち意識へ関係づけられずに存在する或るものを、謂つてゐるのではない。「それら自身に於て」といふことを吾々は、他のものへ関係する観点内でこれとかあれとして表象されるもの、さういふものに対立する反対規定として、理解しなければならぬ。「それら自身に於ける」といふことのこの意味は既に次のことに依つて言葉に現れて来てゐる、すなはちそのこととは、有は「単に定立である」とカントが言つてゐる、といふことである。この「単に」は、或る制限のやうに聞え、すなはち恰も定立がレアリテートすなはち一つの物の事物性に対して一層些細な或るものであるかのやうに、聞える。併し乍ら、「単に」は次のことを指してゐるのである、すなはちそのこととは、或る有るものが夫々何で有るかからは、すなはちカントにとつては概念からは、有は決して説明されない、といふことである。「単に」は、制限してゐるのではなくして、そこからのみ有が純粹に特色づけられるべきところの境域、さういふ境域の内へ有を指定し入れてゐるのである。「単に」

はここでは、純粹にといふことを、意味してゐる。「有」と「有る」とは、それがもつ諸々の意味と変化との一切とともに、或る一つの固有な境界の内へと所屬し入るのである。それらは如何なる物的なるものでもなく、すなはちカントにとつては如何なる對象的なるものでもないのである。

従つて、「有」と「有る」とを思惟するためには、或る別な眼差しを必要とするのであり、その眼差しは、専ら諸の物を考察することやそれらの物を計算に入れて考慮することに依つては、導かれないのである。吾々の眼前に横はつてゐる一箇の石、それは明白に「有る」が、その石をあらゆる方向に向つて探索し探究することを吾々がなし得るにしても、そこに吾々は決して「有る」を見出さないであらう。だがこの石は有る。

「有」は一体何に依つて「単に定立」といふ意味を受取るのであるか。「純粹なる定立」といふ標題の意味は一体何処からそして亦如何にして限界づけられるのであるか。有を定立として解釈するこの解釈は、吾々にとつて依然として不審しく、のみならず恣意的でさへあり、孰れにしても多義的であり従つて不精確であることを、免れないのではないか。

カント自身槌かに「Position“〈定立〉を Setzung〈定立〉と翻譯してゐる。併し、このことは大して手助けにならない。何故ならば、Setzung〈定立〉といふ吾々のドイツ語もラテン語の *positio*〈定立〉と同じ位に多義的であるからである。〈Setzung といふ〉この語は次のことを意味し得る。すなはち、1、定立する、立てる、置く、といふ働き。2、定立されるもの、テーマ。3、定立されてあること、置かれてあること〈位置、姿勢〉、体制。併し、吾々は亦 Position へ Setzung を更に次の如く、以上の三つの意味が統一的に謂はれてゐるといふ風に、理解し得る。すなはち、或る定立されるものをかかるとしてそれが定立されてあることの内_に定立すること。

如何なる場合に於ても、有を定立として特色づけることは或る一つの多義性の内へと指し示すのであり、その多義性は偶然的ではなく吾々にも未知なるものではない。何故ならば、その多義性は、表象へ前に立てる作用として吾

吾に知られてゐるところの彼の定立し定置することの境域の内では如何なる処に於ても、活動してゐるからである。哲学に属する学者用語は表象作用を表す二つの性格的な名前をもつてゐる、すなはち、表象作用は、*percipere, percipio*、〈把握すること、把握、知覚〉であり、すなはち或るものをそれ自身に於て取ること、捉へることである、とともに、*repraesentare*、〈再現前すること〉であり、すなはち自分自身に或るものを対向せしめつつ現前に保持することである。表象作用の内吾々は或るものを吾々の前に立てるのであり、その或るものはそのやうに立てられたもの（定立されたもの）として吾々に対向して、すなはち対象として立つのである。定立としての有は、定立的表象作用の内或るものが定立されてゐることを、謂つてゐる。何がそして如何に定立されるかにその都度従つて、措定、定立、有は、異なる意味をもつのである。それ故、カントは有についての彼のテーゼを擧立した後「純粹理性批判」の本文の内で次の如くに続けるのである、すなはち、

「論理的使用に於てはそれ〔すなはち「単に定立」としての有〕はただ全く判断の繫辭にすぎないのである。神は、全能で、有るといふ命題は、夫々その客体をもつ二つの概念、すなはち神と全能といふ概念を、含んでゐる、有るといふ小辭は、更にそれに加へられる一つの述語ではなく、ただ単に、述語を主語に向つて關係づける、といふ仕方、定立するものにすぎないのである」と。

「証明根拠」へといふ上記の著作の内では、繫辭の「有る」に依つて定立されるところの命題の主語と述語との間の關係は、*respectus logicus*、〈論理的關係觀點〉と称されてゐる。カントが有の「論理的使用」といふことを言つてゐるといふことは、有のもう一つ別な使用が更にあることを、推察せしめる。それと同時に吾々はこの箇處に於て既に、有について本質的なことを経験する。〈それは〉有は費はれるといふ意味に於て「使」はれるへといふことである。その使用を遂行するのは悟性であり、思惟である。

「論理的」使用以外に「有」と「有る」との一体如何なる別な使用が更にあるのであらうか。「神は有る」といふ

命題に於ては主語に如何なる実質的なレアルな述語も附加されるといふ仕方では定立されはしない。寧ろ、主語すなはち神は、それがもつすべての述語とともに、「それ自身に於て」定立されるのである。「有る」は今の場合、神は存在する、神は現に有るといふことを、意味する。「現存在」すなはち「存在」は、慥かに有を意味してゐるが、併し「有」と「有る」とを、命題の主語と述語との間の相對關係の定立といふ意味に於て謂つてゐるのではない。「神は有る」といふ命題に於ける「有る」の定立は、神といふ概念を超え出て行き、この概念へ、その物自身すなわち神といふ客体を現に有るものとして、齎してくる。有はここでは、論理的使用とは區別され、有るものとしての客体それ自身に關して使用されてゐる。従つて吾々は、有の有るもの使用、一層適切には有の客体的使用といふことを、語り得るであらう。批判以前のさきの著作の内では次の如くに書いてゐる、すなはち、

「単にこの關係〔すなはち命題の主語と述語との間の〕のみならず、事物がそれ自身に於て且それ自身にとつて定立されてゐると、觀られるならば、その場合にはこの有は現存在といふ程のことである」と。

「現存在は物の絶対的定立である」と。

或る一つの日附のない覚書 (WW Akademicausgabe XVIII, n. 6276) の内ではカントは、これまづに論述されたことを、簡短に取纏めてゐる、すなはち、

「現存在といふ述語に依つて私は、物に何ものをも附加へるのではなく、物自身を概念に附加へるのである。かくして存在命題に於て私は概念を超え出て行くが、その概念の内では思惟されてゐたものとは別の或る述語へ行くのではなく、まさしく以前と同じだけの、それ以上でもそれ以下でもない諸々の述語をもつたその物自身へ行くのである。ただその場合には、相對的定立を超えて更にそれに加へて絶対的定立が思惟されてゐる」と。

ところで併し、カントにとつては次の如き問、すなはち、果してそして又如何にしてそして又如何なる限界の内

「神は有る」といふ命題は絶対的定立として可能であるのか、といふこの問が、「純粹理性批判」の一切の思惟を驅り立てるとともにそれに続く諸々の主要著作を動かす秘められた刺衝となるのであり、而もどこまでも刺衝として留まるのである。論理的定立としての相対的定立と區別して絶対的定立としての有といふことを言ふことは、恰も絶対的定立の内では如何なる相対關係も定立されないかの如き外見を、確かに喚び起す。併し、絶対的定立に際して現在とか存在といふ意味での有の客体的使用が問題であるとすれば、その場合には批判的省察にとつては次のことが明瞭となるのみならず、その省察を悩ますこととして押し迫ってくる、すなはちそのことは、ここに於ても亦或る一つの相対關係が定立され而もそのことに依つて「有る」がレアルな述語ではないにしても、或る述語といふ性格を受取る、といふことである。

有の論理的使用（ a は b で有る）に於ては命題の主語と述語との間の關係の定立が問題である。有の有るもの的使用——この石は有る（「存在する」）——に於ては我へといふ主体と客体との間の關係の定立が問題であるが、併し乍ら、それは、主体—客体—關係に向つていはばそれを横切つて主語—述語—關係がその間に入りこみそれに接続する、といふ仕方にてである。そのことの内に次のことが存してゐる、すなはちそれは、繫辭としての「有る」は、客体的認識を表す陳述の内では、單に論理的な意味とはもう一つ別の而も一層内容豊富な意味をもつてゐる、といふことである。併し乍ら、後に示される如く、カントは長い省察を経た後に漸くにしてこの洞察に到達するのであり、その洞察を實に「純粹理性批判」の第二版に至つて初めて語り出すのである。その第一版から六年も経つた後に彼は、「有る」すなはち有に關しては一体如何なる事態であるかを、言ひ得るに至るのである。「純粹理性批判」が初めて、定立としての有の解釈の内に、充實と明確な限定性とを齎すのである。

もし誰人がカントに「証明根拠」についての彼の批判以前の著作を書いてゐる時期に、絶対的定立といふ意味に於ける「存在」の下で彼が理解してゐることは、抑々如何にして一層詳細に規定され得るか、問ふたとすれば、そ

の場合カントは彼のその著作を見にくるやうに指示したことであらう、そこには次のやうに言はれてゐる、すなはち、

「〔現存在と存在といふ〕この概念は、それを展開するために何も言はれ得ない程、単純である」と。

カントは更に次の如き原則的な所見を含んだ附註さへ添へてをり、その附註は「純粹理性批判」の出現の時以前に於ける彼の哲學的立場の内への或る洞見を吾々に与へる、すなはち、

「吾々の全認識は併し結局のところ幾つかの分解不可能なる概念に終ることが、洞察されるならば、次のことも亦把握されるのである、すなはちそれは、殆ど分解不可能な諸概念、すなはちそこではへそれらの概念の諸々の微表が事物自身より極めて僅かしか明晰ではなく極く僅かしか單純ではないところの諸概念、さういふ若干の諸概念があるであらう、といふことである。存在についての吾々の説明は丁度このやうな場合である。その説明に依つては説明されるものの概念が極めて僅かな程度しか明瞭にならないことを、私は進んで承認する。併し乍ら、吾々の悟性の諸能力への關係の内_に於ける対象の本性が亦それ以上高い程度への明瞭化を許容しないのである」と。

「対象の本性」すなはちここでは有の本質、それが一層高い程度の明瞭化を許容しないのである。それにも不拘、ここでは次の一つのこととはカントにとつて最初から確定してゐる、すなはちそれは、彼は存在と有とを「吾々の悟性の諸能力への關係の内_に於て」思惟してゐる、といふことである。「純粹理性批判」の内_に於てさへも有は、なほそして再び、定立として規定されるのである。批判的省察も亦慥かに「一層高い程度の明瞭化」を、すなわち諸概念を説明し分解する批判以前の遣り方に従つての明瞭化を、達成してはゐないのである。併し、「批判」は、有とその様_な有り方、その様々な有り方とは吾々が可能的有、現実的有、必然的有といふ名の下で知つてゐる有り方であるが、有とさういふその様々な有り方との別な種類の解明に到達するのである。

一体何が起つたのであるか。有についての省察が、「吾々の悟性の諸能力へ」の有の「關係」についての省察とし

て着手された場合、純粹理性の批判といふことを通して一体何が起つてゐなければならないのであるか。カント自身が「純粹理性批判」の内で次の如き確認に依つて吾々に答を与へてゐる、すなはち、

「もしひとが可能性と現存在と必然性との定義をただ全く純粹悟性の内からのみ汲取らうとすれば、明白な同語反復に依るのとは別な仕方で、可能性と現存在と必然性とを説明し得た者は未だ誰一人としてないのである」(A314, B302) 云。

併し乍ら、まさしくかくの如き説明をカント自身が彼の批判以前の時期に於ては試みてゐるのである。併し乍らその間に次の如き洞察が彼に生じたのである、すなはちその洞察とは、有と諸々の有り方とを専ら「吾々の悟性の諸能力」へだけ關係づけることは、そこから有と諸々の有り方とがそれら自身を説明するところの、といふことは今の場合はそれらの意味が「証拠立て」られるといふことであるが、さういふ仕方ですれら自身を説明するところの、如何なる充分な地平をも授けない、といふ洞察である。

〈それでは〉一体何が欠けてゐるのか。一体如何なる観方の内で吾々の思惟は、〈有とその諸様相との〉或る充分な本質規定に到達するためには、有をその諸様相をも併せて同時に観取しなければならぬのか。「純粹理性批判」の第二版中の或る一つの追加的な註解の内(B302)次の如くに言はれてゐる。すなはち、

可能性と現存在と必然性とは「すべての感性的直観(すなはち、吾々がもつ唯一の直観)が取り除かれる場合には、何ものによつても証拠立て、(すなはち、それらの意味に關して証示されるとともに根拠づけ)られない」と。

この直観なしには客体への關係が有の諸概念に欠けるのであり、その關係を通してのみ、有の諸概念に、カントがそれらの「意義」と名づけるものが、屬して来るのである。「有」は慥かに定立を意味し、すなはち悟性の働きとしての思惟に依る定立作用の内に定立されてあることを、意味する。併し、この定立は、その定立に感性的直観に依つて、すなはち感覺の觸発に依つて、定立可能なるものが与へられる場合、その場合にのみ或るものを客体として、す

なはち対立に齎らされたものとして、定立することをなし得るのであり、そのやうにして或るものを対象として立つことへ齎らすことをなし得るのである。定立は觸発の定立として初めて、カントにとつては有るものの有が何を意味してゐるかを、吾々に理解せしめるのである。

ところで併し、吾々の感覺に依る觸発の内では絶えず諸表象の或る多様性が吾々に与へられてゐる。その与へられた「雜沓」すなはちこの多様なるものの流が、立ち止まり、来て、かくして一つの対象がそれ自身を示し得るためには、その多様なものが秩序づけられねばならず、すなはち結合されねばならない。その結合は併し乍ら、決して感覺に依つて生じて来ることは出来ない。結合作用はすべて、カントに従へば、悟性と称せられる彼の表象力に由来する。悟性の根本動性は、綜合としての定立作用である。その定立〈Position〉は命題〈Proposition〉すなはち判断といふ性格をもつてをり、命題すなはち判断に依つて或るものは或るものとして前に定立され、或る述語が或る主語に「有る」を通して言ひ渡されるのである。併し、吾々に依つて或る客体が認識されるべきであるならば、定立はそれ自身を命題として、觸発に於ける所与へ必然的に關係づけねばならず、その場合には、このことから繫辭としての「有る」は或る新しい意味を受取るのである。カントはこの新しい意味を「純粹理性批判」の第二版(S19, B140ff.)に於て初めて規定する。彼は第十九節の始めに次の如くに書いてゐる。すなはち、

「論理学者達が判断一般について与へてゐる説明、すなはち判断とは、彼等の言ふところに従へば、二つの概念の間の或る關係の表象である、といふ説明には、私は決して満足することが出来なかつた」と。

この説明に関して「一体何処にこの關係が存するのかが、ここでは規定されてゐないこと」を、カントは見出すのである。カントは、判断の論理学的説明の内には、主語に対して述語を定立することが其処に基づくところのもの、さういふものが無いことに氣附くのである。陳述の命題—主語は、認識する我—主体にとつての客体としてのみ、根拠づけをなし得るのである。それ故、カントは本文の内て新なる一節を始めつつ次の如くに続けるのである、すなはち

「併し、私が、如何なる判断の内にも含まれてゐる諸々の与へられた認識の關係を一層精確に探究し、その關係を悟性に所属する關係として、再生的構想力の諸法則に従ふ關係（それ「その關係」は単に主觀的妥当性をもつにすぎない）から區別するならば、その場合には私は次のことを見出すのである、すなはちそのこととは、判断は、諸の与へられた認識を統覚の客体的統一へ齎らす仕方に他ならない、といふことである。それらの認識の内存する關係小辞有るは、所与の諸表象の客体的統一を主觀的統一から區別するために、そのことへ統覚の客体的統一を直指してゐるのである」と。

これらの諸命題をそれらに適はしい仕方では追思する試みに際しては、吾々は何よりも先づ次のことに注目しなければならぬ、すなはちそれは、今や繫辭の「有る」はへさきの場合とは別な仕方では規定されてゐるのみならず、その際、結合作用（集撰作用）の統一へ關はる「有る」の關聯が、明るみに出て來てゐる、といふことである。

有と統一、すなはち Sein へ有るものと Es へ一、この兩者の相依相属性はそれ自身を西洋哲学の偉大なる元初に於て既に思惟に示してゐる。今日吾々に「有」と「統一」といふこの兩標題が安直に挙げられてゐるとすれば、兩者の相依相属について一箇の充分なる答を与へること、或ひは又、況んやこの相依相属の根柢を觀取すること、さういふことをなし得る立場には吾々は殆どゐないのである。何故ならば、吾々は、 Seyn へ言の集撰しつゝ露現する本質から「統一」と統一することを思惟してはゐないし、更に亦吾々は、それ自身を露現する現前として「有」を思惟してもゐないし、況んや既にギリシヤ人達に依つてさへ思惟されなままにされてゐた兩者の相依相属を、吾々は思惟してゐない、からである。

カントの思惟の内では有と統一との相依相属性が如何にそれ自身を叙述し明示してゐるか、更に又そのことに依つて有についてのカントのテーゼが、如何にその一層豊富にして而も初めて基づけを得た内実を、告知してゐるか、その

ことを吾々が追究するに先立つて、カントに依つて引用されてゐる例、その例は繫辭としての「有る」の客体的意味を吾々に明瞭にするのであるが、その例に吾々は言及して置かう。それは次の如くに言はれてゐる、すなはち、

もし私が諸表象の継起を単に主体の内に於ける経過として聯想の諸法則に従つて考察するとしたら、その場合には「私はただ次の如くに言ひ得るにすぎないであらう、すなはち、私が或る一つの物体を荷ふならば、その場合には私は重圧を感じると、併し、それはつまりその物体は重く有るとは、言ひ得ないであらう。この後者が言はんとしてゐるのは、大略次の如きことである、すなはち、これらの両方の表象は客体内に於て、すなはち主体の状態の區別なしに、結合されてをり、単に知覚（どれ程屢々その知覚が反復されようとも）の内に於て一緒になつてゐるだけではない」と。

カントがなした「有る」の解釈に従へば、客体内に於ける命題の——主語と述語との或る結合がその内ではへすなはち「有る」の内では——語つてゐる。如何なる結合もそれ自身とともに或る一つの統一を携行してをり、その結合は所与の多様なものをその統一に向つて、その統一の内へと結合する。併し乍ら、結合はつねに予めその統一へと差向けられてゐるが故に、その統一は結合から初めて成立することは出来ないとするれば、それでは一体何処からその統一は出て来るのか。その統一は、カントに従へば、「一層高くに求められ」ねばならず、すなはち悟性に依る結合的定立以上のところに、求められねばならない。その統一は、如何なる *Sätze* (Satzung) 〈定立〉についてもその一切の *ein* (zusammen) 〈合〉を初めて発源せしめる *einende Einheit* 〈一にする一〉である。それ故、カントはその統一を「根源的に綜合的な統一」と名づけるのである。その統一は一切の表象作用の内に、すなはち知覚へ（把握、*Perzeption*）の内に、元来既にそこに居合せてゐる (*adest*)。その統一は統覚（*Apperzeption*）の根源的綜合の統一である。その統一が有るものの有を、カント的に言へば、客体の客体性を、可能にするが故に、その統一は一層高くに存してをり、すなはち客体を超えて存してゐる。その統一が對一象を對一象として可能にするが故に、そ

の統一は「超越論的統覚」と称せられる。それについてカントは第十五節の終りに於て（B331）次の如くに言つてゐる。すなはち、

超越論的統覚は「それ自身、諸々の判断の内に於ける様々な諸概念の統一の根拠を、従つて悟性の可能性の〔根拠を〕、悟性の論理的使用に於てさへも含んでゐる」と。

カントはその批判以前の著作の内ではなほ次のことに、すなはち有と存在とは悟性能力に対するそれらの關係に於て更にそれ以上は説明され得ないといふことに、甘んじてゐたのであるが、彼は純粹理性の批判を通じて、悟性の諸能力を殊更に明らかにするのみならず更に悟性それ自身の可能性へすなはち、悟性それ自身を可能にすることへをもその可能性の根拠から説明するところまで、到達したのである。悟性の可能性の場所へすなはち悟性を可能にする場所への内へのこの帰行きに際しても、批判以前の考察から批判的に問ふことの圏域の内へ踏み入るこの決定的な歩みに際しても、併し乍ら確かに、一つのことゝが手を触れられないままに保持されてゐる。それは、カントが有に於いての彼のテーゼを拳立し説明する際それにしがみ着いたところの手引の糸であり、すなはち、有とその諸々の有り方とは悟性に対するそれらの関わり合ひから規定されるに相違ないといふことである。

勿論、悟性を一層根源的に批判的に規定することは今や、有の或る変転した一層豊富な解明に対しても、保証を与える。何故ならば、今や諸々の様相すなはち「現存在」の諸々の有り方とそれらの規定とは、明確にさういふものとしてカント的思惟の視圈の内へ到達し入るからである。そこから出立して有るものの有の規定が進行の内に齎らされ得るところの場所、その場所に到達したといふ確信の内に、カント自身は生きてゐる。このことは更に又或る一つの註解に依つて証拠立てられるのであり、その註解は「純粹理性批判」の第二版の本文の内ですべて書かれたのである（§16, B134, Anm.）すなはち、

「かくして統覚の綜合的統一は最高点であり、その点にひとは一切の悟性使用を、論理学全体さへをも、そしてそ

れへ論理学へに従つて超越論的—哲学を、結び着けねばならないのである、寔にこの能力「上に言はれた統覚」は悟性それ自身である」と。

統覚とは次のことを意味する、すなはちそれは、1、予め一切の表象作用の内にその作用と共にへあつて、統一しつつあるへ働きとしてその場に居合せてゐることであり、2、統一のかくの如き先与に際して同時に触発へ差向けられてゐることである。そのやうに理解されたる統覚は「それにひとが：論理学全体を：結び着けねばならないところの最高点」である。カントは、それへひとが結び着けねばならない、とは言つてゐない。もしさう言ふとすれば、論理学全体は、この「論理学」なしに存立する或るものへ、後から追加的な仕方で初めて附着されるといふことなるであらう。超越論的統覚は寧ろ「それに」論理学全体が論理学として既に結び着き依繋してゐるところの「最高点」であり、論理学はその点を、論理学の本質全体が超越論的統覚に依存するといふ仕方、充たしてゐるのであり、それ故に、論理学はこの根源からして而もそのやうな仕方へすなはち、この根源からして、といふ仕方へでのみ思惟されねばならないのである。

それでは本文中の「それに従つて」といふこの言ひ廻しは一体何を意味してゐるのか。それは論理学全体がそれ自身だけで超越論的—哲学に秩序上優先してゐるといふことを意味してゐるのではなく、次のことを言はんとしてゐるのである、すなはちそれは、論理学全体が超越論的統覚といふ場所の内へ編入されて秩序づけられてゐる場合に初めて且その場合にのみ、論理学全体は、感性的直観の所与に關係づけられた批判的有論の内部に於て機能を、すなはち有るものの有の諸概念（諸範疇）と諸原則とを規定するための手引きとしての機能を、果し得るのである、といふことである。事態はそのやうである、何故ならば、「第一の純粹なる悟性認識」〔すなはち、有るものの有の基準決定的な型刻〕は「統覚の根源的な綜合的統一の原則」である、からである（S17, B137）。従つて、この原則は一にするこの原則であり、「統一」は決して単なる一緒にといふことではなく、それは一にしつゝ——集撰しつゝあるので

あり、本源的な意味に於ける *λογος* であるが、とはいへその *λογος* は我—主体の上へと置き移され置き変へられてゐる。この *λογος* がそれ自身の下に「論理学全体」を拘留してゐるのである。

カントは、純粹理性の批判の結果として変転された有論、それは有るものの有を経験の対象の対象性として追思するのであるが、さういふ有論を超越論的—哲学といふ名前と呼んでゐる。それへすなはち超越論的—哲学としての有論—は論理学に基づいてゐる。併し、その論理学は最早形式論理学ではなく、超越論的統覚の根源的な綜合的統一から規定された論理学である。かくの如き論理学に有論は基づくのである。このことは既に言はれたこと、すなはち有と存在とはそれ自身を悟性使用への関わり合ひから規定するといふことを、確証する。

有るものの有の解釈を導く主導標題はここでもなほ次のやうに言はれてゐる、すなはち、有と思惟と。併し、適正なる悟性使用は次のことにもとづいてゐる、すなはちそれは、定立しつ—判断する表象作用としての思惟、すなはち定立にして命題としての思惟は、如何なる場合に於ても超越論的統覚から規定されてゐるとともに感覚に依る触発へ關係づけられてゐる、といふことである。思惟は、人間の、感性に依つて襲はれ捉へられたる主体性すなはち有限的主体性の内へと、沈め入れられてゐるのである。「我思惟す」とは次のことを言ふ、すなはち、我は、諸表象の感性的に与へられたる或る多様性を、統覚の統一、その統一は諸々の純粹悟性概念すなはち諸範疇の明確に限界づけられた多様の内へとそれ自身を分節するのであるが、統覚のさういふ統一を予め観取しつ—その予観にもとづいて、結合すると。

悟性の本質を批判的に展開することと一に於て、悟性の使用の制限、すなはち、感性的直観とその直観の純粹諸形式とを通して与へられるもの、さういふものの限定に悟性の使用を制限することが、行はれてゆく。逆に、悟性使用を経験に局限することは同時に、悟性それ自身の一層根源的な本質規定への軌道を開く。定立の内て定立されるものは、或る与へられたものが定立されるに至つたものであり、その与へられたものはそれ自身、かくの如き定立作用と

定置作用とに依つてその定立作用と定置作用にとつて、對置的に立てられたものすなはち對象になり、對向的に投げられたものすなはち客体になるのである。定立されてあること (Position) すなはち有は、變じて對象性になる。カントは「純粹理性批判」の内、例へば、有についての彼のテーゼの肯定的陳述の内、に於けるが如く、なほ物といふことを語つてゐるとはいへ、その場合「物」はつねに、表象された或るものつまりX、といふ最も広い意味に於ける對一象、客一体を意味してゐる。従つて、カントは「純粹理性批判」の第二版の序言の内、(B XXVII) 次の如くに言ふのである、すなはち、批判は

「客体を二様の意義に於て解することを教へる、すなはち、現象としてか、或ひは物自体としてか」と。(未完)

(辻村公一訳)

ここに邦訳されたハイデッガー教授の寄稿論文について、訳者は次の経緯を報告して置かねばならない。昨年十二月、訳者が教授に田辺先生の御病床の様子、御逝去のこと、及び『哲学研究』の追悼記念号の計画について書き、何か追憶の一文を寄稿して下さいることを依頼したのに対して、教授はその当時黄疸に罹つてをられ一時は重篤なる状態に陥つてをられたのであるが、クリスマススの日に臥床されたまま直ちに御返事を下され、その一節には次の如くに書かれてゐた。「深く尊敬する田辺教授の御病氣、御逝去、御葬儀のことについて知らせてくださつて、有難う。追悼記念号の計画は大変結構です。…私には、君の言ふとは別の考へがあります、それは論文「有についてのカントのテーゼ」の一部又は全部を、右の記念号への寄稿とするといふ提案です。この手紙と同時に飛行便で右の論文を一冊君のところへ送らせませう」と。教授自身追悼文を書くことと不可能な状態にをられたこと、更に亦思想家としての田辺先生を記念するためには自分自身の思惟作品を以てすべきであるといふこと、さういふことからこの論文の邦訳を寄せられたのであると思はれる。そのことに對して、訳者は田辺先生の門下の末に列なる者として、ハイデッガー教授の終始渝ることなき御好意に深甚なる感謝の意を表して置きたいと思ふ。尚この論文はカントについての教授の最も新しい思想を示すものである。(訳者)